

各位

会 社 名	株 式 会 社 プ ロ ネ ク サ ス
代 表 者 名	代 表 取 締 役 社 長 上 野 剛 史 (コード番号 7893 東証プライム)
問 合 せ 先	常務執行役員 経営企画管理部長 兼 社長室長 高 松 純
電 話 番 号	0 3 - 5 7 7 7 - 3 1 1 1

「第 17 回プロネクサス懸賞論文」受賞論文決定 および「第 18 回」募集開始のお知らせ

株式会社プロネクサスは、資本市場の健全な発展に寄与するとともに、若い研究者、学生等の研究活動を支援することを目的として、2009年から毎年、「プロネクサス懸賞論文」を開催しております。本年は13本の応募があり、厳正なる審査の結果、この度、受賞論文が決定いたしましたので、下記のとおりお知らせいたします。

なお、当該懸賞論文は株式会社日本取引所グループおよび株式会社東京証券取引所のご後援をいただいております。

記

1. 選考結果の概要

「上場会社のディスクロージャー・IRをより効果的、効率的なものにするための研究および提案」というテーマに対して、部門Ⅰ（個人または2名）に8本、部門Ⅱ（大学生グループ）に5本、計13本の論文の応募があり、審査委員会にて厳正かつ多面的に検討を行い、部門Ⅰで佳作2本、部門Ⅱで優秀賞1本・佳作2本の論文を選定いたしました。

2. 第17回審査結果：受賞者及び受賞論文名（敬称略）

部門Ⅰ (個人または2名)	佳 作	一橋大学大学院経営管理研究科経営分析プログラム1年 穴戸 健人 「株式非公開化における特別委員会答申の分析 ―買収主体、委員の専門性、買付PBRに焦点を当てて―」
	佳 作	東京経済大学経営学部 荒井 陽太、猪崎 航史 「業績連動配当における政策運用実態の分析」
部門Ⅱ (大学生グループ)	優秀賞	一橋大学商学部 円谷昭一ゼミナール3年 吉村 拓真、甘 伊娜、平島 駿太、眞弓 珠妃 「『資本コストや株価を意識した経営』の開示実態とその改善案―PBRの分析に焦点を当てつつ―」
	佳 作	獨協大学経済学部 松本守ゼミナール4年 加藤 ももこ、北原 さくら、久保 史織、黒岩 央、寺田 佳乃、 中村 海龍、森 天音、松井 真 「統合報告書から得られる経営者の視覚的情報にはどのような意味があるのか？ ―経営者のナルシズムと経営者業績予想の関係からの改善提言―」
	佳 作	東洋大学経営学部 調勇二ゼミナール3年 真木 菜那美、猪木 実里、齋藤 巧 「日英米比較と投資家インタビューから探る日本企業の対話型IR改革」

3. 選考結果の概要

(1)部門Ⅰ

部門Ⅰの1つ目の佳作は、宍戸健人氏（一橋大学大学院経営管理研究科経営分析プログラム1年）の「株式非公開化における特別委員会答申の分析－買収主体、委員の専門性、買付PBRに焦点を当てて－」であります。企業が株式を非公開化する場合、買収価格をめぐる利害関係者間の公正性を促進するため特別委員会が設置されます。そこで、本研究の目的は、特別委員会の答申内容が、買収の形態（ファンド・投資会社による買収、子会社化、元々の主要株主による完全子会社化、MBO）によって異なるのか否か、特別委員会委員の属性（事業会社出身、公認会計士・税理士、弁護士）が影響するか、企業のPBRが1倍未満か否かで異なるのかを検証し、特別委員会の有り方に関する提言をすることにあります。

2つ目の佳作は、荒井陽太氏（東京経済大学経営学部経営学科3年）・猪崎航史氏（同2年）の「業績連動配当における政策運用実態の分析」であります。本研究の目的は、業績連動配当政策を採用しているように見える企業が実際に業績に連動する配当をしているのか否かを、企業属性（上場市場、業種、外国人投資家比率、時価総額、当期純利益の増減など）ごとに分析することにあります。

(2)部門Ⅱ

部門Ⅱの優秀賞は、吉村拓真氏（一橋大学商学部3年・円谷昭一ゼミナール）を代表とする「『資本コストや株価を意識した経営』の開示実態とその改善案－PBRの分析に焦点を当てつつ－」であります。日本では長らく、米国や欧州よりもPBRが1倍未満の企業が多く存在し、東証が「資本コストや株価を意識した経営」の実践を要請して、PBRが1倍未満の企業の減少を図ってきました。しかし、はたして各企業がこの要請を重く受け止め、方策をたてて実現しようとしているのか否かに疑問があることから、本研究の目的は、この問題を明確にすることにあります。

部門Ⅱの1つめの佳作は、加藤ももこ氏（獨協大学経済学部4年・松本守ゼミナール）を代表とする「統合報告書から得られる経営者の視覚的情報にはどのような意味があるのか？－経営者のナルシズムと経営者業績予想の関係からの改善提言－」であります。本研究の目的は、統合報告書などを対象に経営者が登場する写真に関する特徴から経営者のナルシズムを推定し、それと経営者業績予想誤差（期初予想値－当期実績値）との関係を明らかにし、投資決定に資する情報としての経営者バイアスの分析方法を提案することにあります。

部門Ⅱの2つめの佳作は、真木菜那美氏（東洋大学経営学部3年・調勇二ゼミナール）を代表とする「日米英比較と投資家インタビューから探る日本企業の対話型IR改革」であります。本研究の目的は、日本企業のIRは一方的な報告会の傾向が強く、量的な開示量は増加しつつも利用者のニーズにあった情報開示を促進する上で対話型IRがより重要となっていることに着目し、日本企業のIRの改善に資する政策の提言をすることにあります。

4. 次回プロネクサス懸賞論文の募集

株式会社プロネクサスは、2026年も引き続き、若い研究者や学生等の研究支援のため、「第18回プロネクサス懸賞論文」を以下のとおり募集いたします。

【第18回募集要項】

1. テーマ：「上場会社のディスクロージャー・IRをより効果的、効率的なものにするための研究および提案」です。実証結果を出すための実証分析に関する論文は不可としますが、提案を補強するための実態調査、ケース分析等を論文の一部に含めることはできます。また、IRの具体的な表示方法等の工夫を提案することもできます。

2. 応募締切日：2026年10月20日（火）

3. 応募資格：

【部門Ⅰ】

- ①40歳以下（2026年10月20日時点）の日本在住の大学生・大学院生・研究者・一般社会人等の個人
- ②いずれも①に該当する2名

【部門Ⅱ】

同一大学の大学生（2026年10月20日時点）による3名以上10名以下（代表者1名を含みます）のグループ（例えば、XX大学XXゼミナール、XX大学XX研究会等のグループです。応募に当たっては、グループ名を明記してください）。

なお、論文・要旨・応募メールには、応募部門（部門Ⅰまたは部門Ⅱ）および執筆者名・共同研究者名（部門Ⅱの場合は、グループ名及び代表者名・共同研究者名）を明記してください。

4. 懸賞金額：部門Ⅰおよび部門Ⅱともに最優秀賞50万円、優秀賞30万円、佳作10万円

5. 審査方法：下記の審査委員で構成する審査委員会で審査を行います。（敬称略）

委員長	慶應義塾大学 名誉教授	黒川 行治
委員	前会計教育研修機構 代表理事専務	新井 武広
委員	早稲田大学商学大学院 教授	川村 義則
委員	前早稲田大学大学院経営管理研究科 教授	小宮山 賢
委員	株式会社バリュークリエイト パートナー	佐藤 明
委員	青山学院大学大学院 教授	多賀谷 充
委員	株式会社プロネクサス 名誉会長	上野 守生

6. 後 援：株式会社日本取引所グループ・株式会社東京証券取引所

【本件に関するお問合せ先】

株式会社プロネクサス

ディスクロージャー企画業務推進部 調査研究チーム 懸賞論文係 小林・原口

E-mail : souken@pronexus.co.jp

◎ 詳細は、専用ホームページをご参照ください。

<https://www.pronexus.co.jp/home/souken/index.html>

【プロネクサスについて】

本 社：〒105-0022 東京都港区海岸一丁目2番20号 汐留ビルディング5階

設 立：1947年5月1日

代 表 者：代表取締役社長 上野 剛史

資 本 金：3,058百万円

主な事業内容：情報開示・IRをはじめとしたコーポレートコミュニケーション支援

証 券 コード：7893 (東証プライム)

URL <https://www.pronexus.co.jp/>

以 上